

TA

MURA

田村遺跡

—VIII—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第302集



1992

福岡市教育委員会



調査地馬力村、愛知県(昭和23年8月)



た むら 田 村 遺 跡

—VIII—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第302集



遺跡略号 TMR

調査番号 8934

1992

福岡市教育委員会

序

福岡市はアジア大陸との地理的な関係から、先史時代より東アジアとの文化交流の門戸として、発展を遂げてきました。このような歴史的背景から、市内には各時代の文化財が数多く埋蔵されています。しかしながら、近年の開発事業によって、我々の祖先が地中に残してきた埋蔵文化財が消滅しつつあります。このため本市教育委員会では、遺跡を保存すべく各種開発事業に先立って発掘調査を行い、記録保存によって後世に伝えるように努めています。

今回報告します田村遺跡群の発掘調査報告書は、公民館建設工事に先立って行った発掘調査の記録です。この調査では、福岡市西部における中世集落の様子を解明するとともに、社会構造の解明を含む多くの成果を得ることが出来ました。今後、本報告書および資料が、学術研究だけに留まらず、市民各位の文化財に対する認識を深めるために寄与することを深く願うものです。

最後に、発掘調査にあたり、ご協力いただいた関係各位に対し、深く感謝致します。

平成4年1月13日

福岡市教育委員会

教育長 井口雄哉

例　　言

1. 本報告書は、福岡市教育委員会が公民館建設予定地の福岡市早良区大字田宇鶴園835-1に所存する田村遺跡群を1988年（昭和63年）7月5日～同年8月16日に発掘調査した記録である。
2. 遺跡名は本市教育委員会発行の文化財分布地図－西部II－からによる。
3. 本報告書で用いた方位は全て磁北である。この方位は真北より6°21'西偏する。
4. 本報告書に掲載した図面の実測は、遺構を濱石哲也、瀧本正志、高橋建治、遺物の実測を瀧本がそれぞれ担当した。
5. 本報告書に掲載した写真の撮影は、遺構、遺物とも瀧本が担当した。
6. 本報告書の執筆・編集は瀧本が担当した。
7. 本報告書II係わる発掘調査の遺物・記録類の全ては、福岡市埋蔵文化財センター（博多区井相田2丁目）に収蔵されているので活用されたい。

遺跡名	田村遺跡群		
遺跡略号	T M R	調査番号	8934
調査地	福岡市早良区大字田宇鶴園835-1		
調査期間	1989年（昭和63年）7月5日～同年8月16日		
開発面積	600m ²	調査面積	540m ²

本文目次

第1章はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
第2章遺跡の立地と概要	5
1. 遺跡の立地と歴史的環境	5
2. 遺跡の概要	5
第3章調査の記録	7
1. 遺跡の概要	7
2. 遺構・遺物	21
第4章まとめ	24

挿図・図版目次

図版1 調査地遠景	表紙
図版2 調査地周辺航空写真（昭和23年頃）	表見返し
図版3 調査地周辺航空写真（昭和62年）	表見返し
Fig.1 調査地位置図（縮尺1/200,000）	IV
Fig.2 亂葬分布図（縮尺1/25,000）	2
Fig.3 田村遺跡群地形図（縮尺1/8,000）	4
Fig.4 調査地周辺航空写真（昭和23年頃）	6
Fig.5 調査地周辺航空写真（昭和62年頃）	7
Fig.6 調査地遠景（東から）	8
Fig.7 調査地周辺地形図（縮尺1/1,000）	8
Fig.8 上層略図	9
Fig.9 調査地全景（南から）	10
Fig.10 調査地周全景（東から）	10
Fig.11 遺構配置図（縮尺1/150）	折込み
Fig.12 SK01土坑実測図（縮尺1/25）	11
Fig.13 SK01土坑（北から）	11
Fig.14 SK01土坑出土遺物	11
Fig.15 SK01土坑出土遺物実測図（縮尺1/3）	11
Fig.16 柱穴出土遺物実測図（縮尺1/3）	12
Fig.17 柱穴出土遺物	12



Fig. 1 調査地位置図 (縮尺1/200,000)

第1章 はじめに

1. 発掘調査に至る経過

福岡市は、大陸に近いという地理的特性から対外交流の拠点として古代から栄えてきました。現代では行政・経済・教育及び情報機能を集積させた九州の中核都市として発展を遂げています。このため、都市機能の拡大・強化と並行して人口の増加も他の都市に比べて顕著で、1975年に102万人を数えていたのが、1991年では125万人に達しました。このような短期間における人口の増加は、季節的生活基盤使節の充実化の他に、新たな生活基盤施設の設置を必要とします。このような施設のひとつに社会教育施設があります。特に、福岡市教育委員会では社会教育法の主旨に沿って、市民の学習活動の場の充実を図るために公民館の新設・改築事業を継続して実施しています。平成3年度現在は128館を数え、毎年4~5館の新設・改築を行っています。このために、埋蔵文化財包蔵地域内に公民館が建設される場合も多く、社会教育課と埋蔵文化財課は公民館建設に際して密接な連絡をとり、円滑な事業の実施を図ってまいりました。

1989年4月、教育委員会社会教育課より埋蔵文化財課に、早良区内の公民館建設予定地における埋蔵文化財の有無について確認依頼がありました。埋蔵文化財課では書類審査をした結果、当該地が田村遺跡群と呼ばれる埋蔵文化財包蔵地域に含まれていること、さらに近隣地において中世を中心とした遺構・遺物が発見されていることから、4月20日にバックフォーを使った試掘調査を実施しました。その結果、中世を中心とした柱穴・溝や同時期の遺物が発見され、公民館建設予定地全域において中世集落の存在を示唆する資料を得ることになりました。この試掘成果をもとに社会教育課と埋蔵文化財の取扱について協議を行いましたが、建設予定地を変更することは困難なことから、発掘調査を実施することになりました。埋蔵文化財課は、この協議に基づき、1989年(平成元年)7月5日~同年8月16日に調査を実施しました。

2. 発掘調査の組織

調査委託 福岡市教育委員会社会教育部社会教育課

調査主体 福岡市教育委員会文化部(現 文化財部) 埋蔵文化財課

教育長 井口雄哉 佐藤善郎(現 福岡地区水道企画課)

文化財部長 花田兎一

埋蔵文化財課長 折尾 学 柳田純孝(現 埋蔵文化財センター所長)

同課第1係長 飛高憲雄

調査担当 同課第1係 濱石哲也 渡本正志(現 文化財課課長)

事務担当 同課第1係 寺崎幸男 松延好文(現 産業指導課)

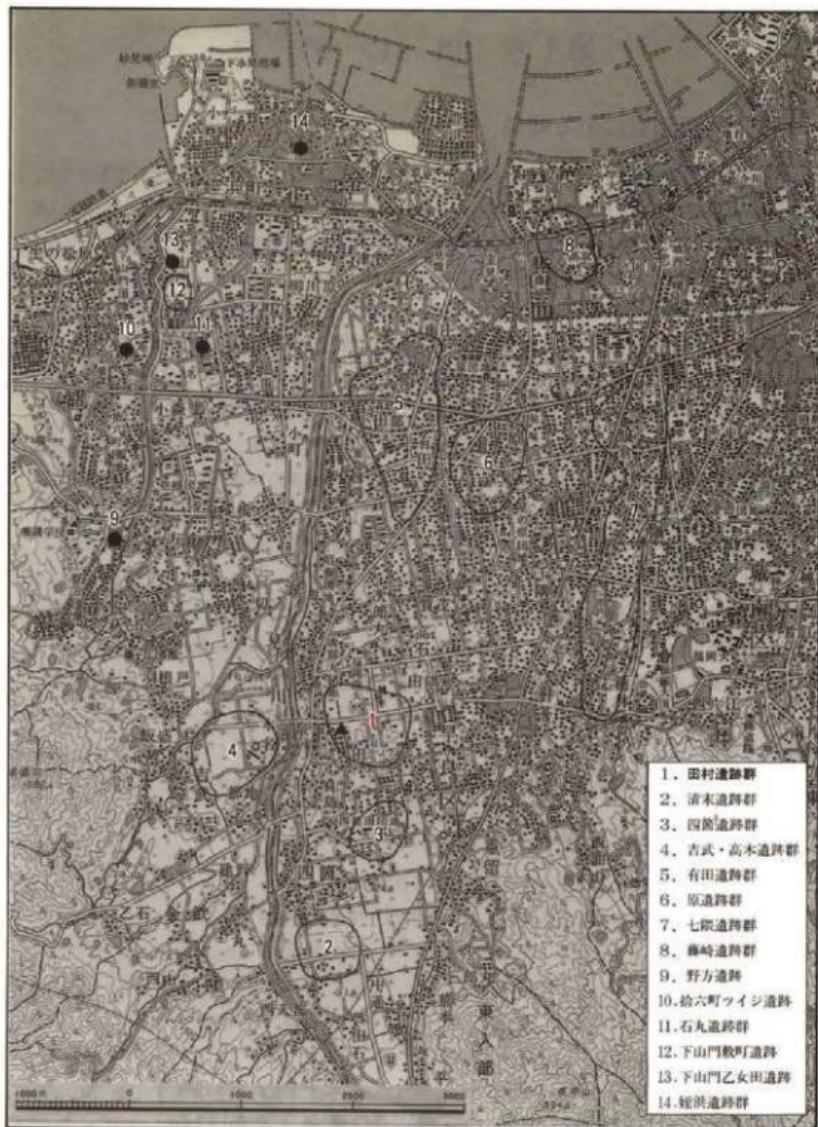


Fig.2 道路分布図 (縮尺1/25,000)

第2章 遺跡の立地と概要

1. 遺跡の立地と歴史的環境

福岡市の北半部、博多湾を潤すように位置する平坦地を一般的に福岡平野と呼んでいるが、地形的には丘陵等によって画され、いくつかの平野から成っている。この福岡平野の西部を占めるのが早良平野である。早良平野は、西を脊振山・長垂山、東を油山から派生した丘陵によって画された沖積平野である。平野の形成は、主に水源を脊振山系に発し、平野中央を北流して博多湾に達する室見川およびその水系に属する大小の河川による。これら河川の流路は国内河川の有する特質と同様に、急勾配、短距離を呈している。このため、丘陵裾部から河川近辺までの土質は砂礫層で、早良平野そのものが扇状地を呈しているといえよう。

田村遺跡群は、早良平野の中央部、早良区大字田に所在し、範囲は東西700m・南北800mを測る。調査地はFig. 1に示すように、遺跡群の西辺部中央、室見川の東岸400mに位置する。標高は14~17mを呈し、周辺は低位水田が広がる。

田村遺跡群周辺においては原始より連續的に人々の生活の跡を見ることができる。

縄文時代の遺跡としては田村遺跡群の南に位置する四箇遺跡、岩本遺跡がある。早~晩期にいたる各期の遺構・遺物が確認されて、周辺地域の地形および当時の生活環境を知ることができます。

弥生時代前半期の遺跡としては田村遺跡群の南に位置する東入部遺跡、西に位置する吉武高木遺跡がある。東入部遺跡・吉武高木遺跡とも弥生時代前期から中期にかけての葬棺墓を中心とする埋葬遺跡で、一部の墓には劍、装飾品等が副葬されている。中期から後期にかけては、早良平野の海浜部近くでも数多く発見されており、著名な遺跡だけでも藤崎遺跡群、姪浜遺跡群、拾六町ツイシ遺跡、野方遺跡、野方久保遺跡、有田遺跡群、原遺跡群などが確認されている。これらの遺跡の大半は埋葬遺跡であるが、各時期における遺跡の出現状況は、土木技術等の開発に裏打ちされた平野低地への進出を示している。

古墳時代では室見川両岸において、櫛渡古墳、坪塚古墳、梅林古墳などの一連の首長墓が造営される。後期の油山、飯盛山、叶岳などの平野を囲む各山麓には円墳等が築造され、群集墳が形成される。

古代から中世の遺跡としては、下山門敷町遺跡、有田遺跡群、原遺跡群、清木遺跡群がある。田村遺跡群の南に位置する清木遺跡では在地豪族の館跡と推定される建物、濠が発見されている。

また、調査地周辺には、Fig. 2でも明瞭に認められるように整然とした方形の地割、すなわち条里地形が良好な状態で遺存している。

なお、本文末に関係遺跡発掘調査報告書一覧を掲載しているので参照されたい。

2. 遺跡の概要

田村遺跡群の調査については、第一表に示すように、これまでに11次の調査が行われている。調査では縄文時代早期～近世にいたる多くの遺構・遺物が発見されている。これらの遺構・遺物が示す道路の発展期は縄文時代後・晚期、弥生時代、平安時代後期～室町時代初頭の三つの時期にピークをもつとされている。特に、本遺跡群においては掘立柱建物群を中心とした中世の集落が発見されており、中世の社会構造を知る上で貴重な資料を提供している。

第1次調査 四世紀後半の土坑、10世紀の土坑等が発見されている。

第2次調査 縄文時代の埋葬、弥生時代の河川および井堰、古代・中世の柵・掘立柱建物群・堅穴住居址・土塙墓等が発見されている。中世の遺構は11世紀後半～14世紀初頭、特に12、13世紀を中心とする集落である。

第3次調査 弥生時代前期～中期の堅穴住居址、土塙、河川とそれに伴う杭列、古墳時代の

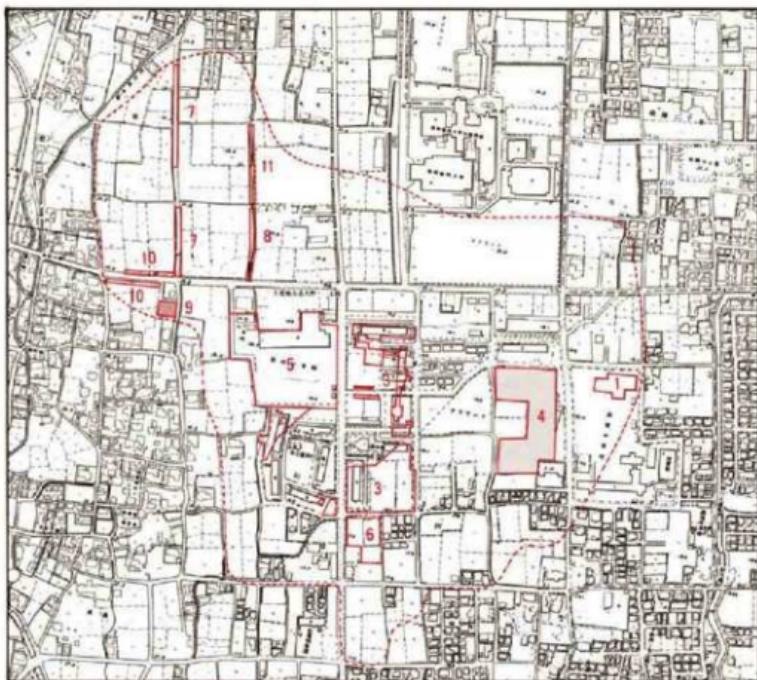


Fig. 3 調査地周辺地形図 (縮尺1/3,000)

水田、中世の掘立柱建物群、井戸、土壙等が発見されている。中世の造構は11世紀代を主体とする集落である。

第4次調査 繩文時代は後・晚期の石器、土器。古代～中世には、掘立柱建物群、竪穴、井戸等が多く発見されている。中世の造構は11世紀代を主体とする集落である。

第5次調査 繩文時代晚期の溝・土坑、弥生時代前期の表棺墓18基、11世紀～14世紀にかけての掘立柱建物100棟以上・井戸11基・土坑・溝等が発見された。特に掘立柱建物群をはじめとする造構の在り方は、中世における集落の変遷を知る上で貴重な資料を提供した。

第6次調査 繩文時代後・晚期の小穴を検出した。

第7次調査 古墳時代（5世紀前半）の竪穴住居址、中世（12世紀後半～13世紀）の溝、土壙が発見されている。

第8次調査 第5次調査で発見した中世の南北溝が北に直線的に続いていることが確認された。溝は規模を縮小させながらも現在に存続していた。土地区画に関連するものである。

第9次調査 本報告である。繩文時代晚期の土器、石器、中世の溝、土壙、柱穴等が発見された。これまでに発見された中世集落の西辺を示すものである。

第10次調査 道路改良工事に伴って実施した。中世の溝および柱穴を発見した。

第11次調査 第5・8次調査で発見した中世の南北溝が北に直線的に続いていることが確認された。しかし、中世の溝は途中で消滅する。

調査次数	調査番号	調査地点	調査原因	調査面積	調査期間	調査報告書
1	7803	高寺	学校建設	3,000m ²	1978.10.11～1978.12.2	福岡市報第70集 1981
2	8034	第1地点	団地建設	2,650m ²	1980.12.5～1981.4.14	福岡市報第89集 1982
	8035	第2地点				福岡市報第104集 1984
	8144	第3地点	団地建設	12,820m ²	1981.4.22～1982.5.15	福岡市報第167集 1987
3	8145	第4地点				
	8146	第5地点				
4	8233	第6地点	団地建設	8,500m ²	1983.1.20～1983.6.15	福岡市報第216集 1990
5	8404	第10地点	学校建設	17,000m ²	1984.7.1～1985.7.6	福岡市報第192集 1988 福岡市報第200集 1989
6	8429	第11地点	店舗建設	800m ²	1984.8.1～1984.9.10	未報告
7	8447	第12地点	店舗建設	1,800m ²	1984.12.1～1984.12.29	福岡市報第168集 1987
8	8847	第13地点	道路建設	700m ²	1988.12.2～1989.3.11	未報告
9	8934	第14地点	公民館建設	540m ²	1989.7.5～1989.8.16	未報告
10	8970	第15地点	道路建設	600m ²	1990.2.8～1990.4.20	未報告
11	9059	第16地点	道路建設	600m ²	1991.1.16～1991.3.9	未報告

第一表 田村遺跡群調査一覧



Fig. 4 調査地周辺航空写真 (昭和23年頃)

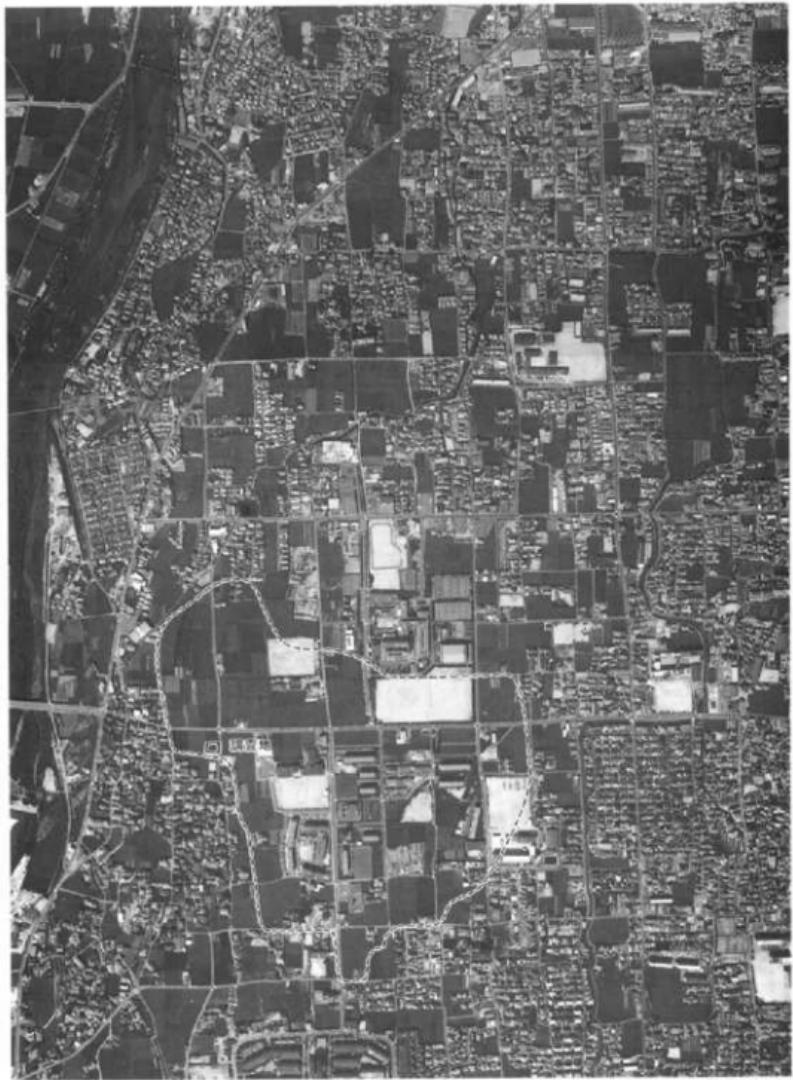


Fig. 5 調査地周辺航空写真 (昭和62年)⁴⁾



Fig. 6 調査地遠景（東から）



Fig. 7 調査地周辺地形図（縮尺1/1,000）

第3章 調査の記録

1. 調査の概要

今調査地は、山村遺跡群の西辺部に位置し標高約15mを測る水田である。層序はFig.8に示すように上層から、耕作土・床土、黄褐色砂質土・灰色砂質土・灰色粗砂である。調査では表土（耕作土）下約30cmの黄褐色砂質土層上面で遺構を検出したが、調査区西半部では黄褐色砂質土上層は消滅し、灰色粗砂層上面で遺構を検出した。その結果、中世を中心とした溝、土坑、小穴を検出したが、遺構の密度は低い。とくに、遺跡群の中心部から離れる調査区西半部では特に顕著である。溝は、自然流路もしくは耕作時に掘削されたものと思われ、集落に関連するものとは考えがたい。調査区東半部に集中する小穴は多数検出されたが建物規模を復元するにはいたらなかった。遺物は縄文時代から中世に属する土器、石器、陶磁器等が出土したが、遺構に伴うものは中世の時期に限定され、他の時期に属するものは遺物器皿の磨滅度から原位置を保っているとは考えがたい。以下時代別・層別遺構ごとに記述する。

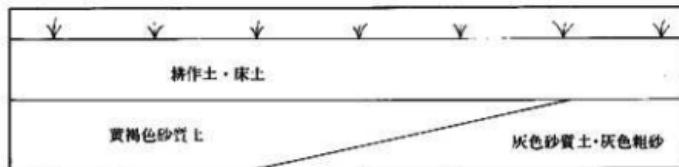


Fig.8 土層略図

2. 遺構と遺物

縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は認められなかつたが、石器、夔形土器が出土している。石器は黒曜石製のサイドスクリーパーである。夔形土器は口縁部の破片で全形を知りえない。口縁部は直線的に内湾し、屈折部・口縁端部にはそれぞれ一条の凸帯がめぐる。凸帯には箆状工具による刻み目が施されている。

中世の遺構と遺物

中世の遺構には溝13、土坑1、小穴が検出されたが、大半が調査区東半部に位置する。

溝 SD01は調査区東南隅に位置する斜行溝である。幅0.6m~1.5mを測る。SD02はSD01の西に接する溝で、大きな回み的様相を呈する。SD03~11は南北方向に直線的にある溝状遺構で、幅30cm前後を測る。耕作時に深耕等で掘られたものと思われる。

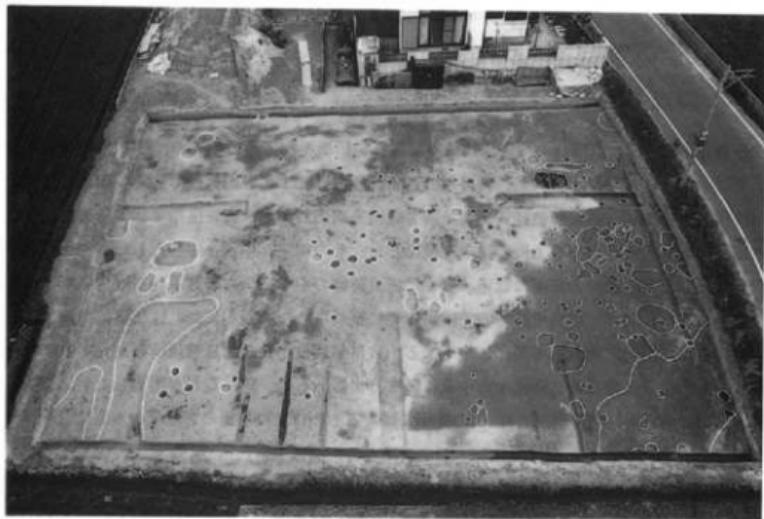


Fig.9 調査地全景から（南から）



Fig.10 調査地全景（東から）

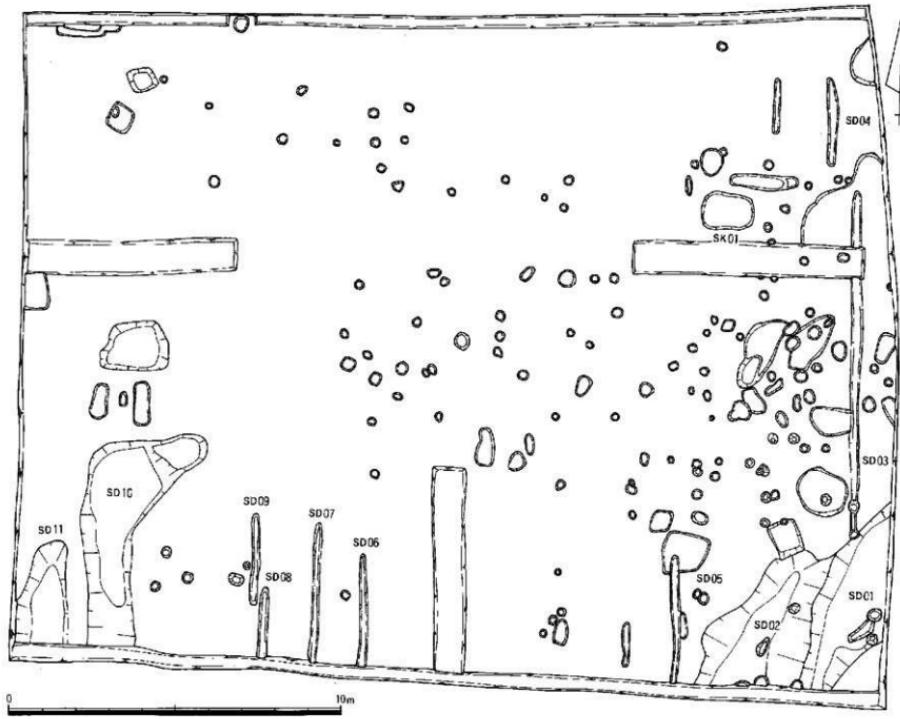


Fig.11 造構配置図 (縮尺1/150)

土坑 SKO1 (Fig.12,13) は調査区東北部に位置する。隅丸長方形の平面形を量し、長辺(東西)約80cm、短辺(南北)約55cm、深さ約10cmを測る。壁面は弧を描くようにゆるやかに立ち上がる。

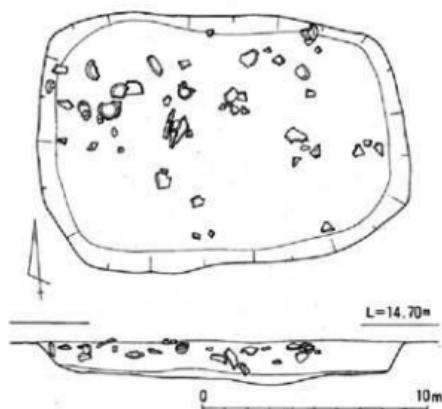


Fig.12 SKO1 土坑実測図 (縮尺1/25)

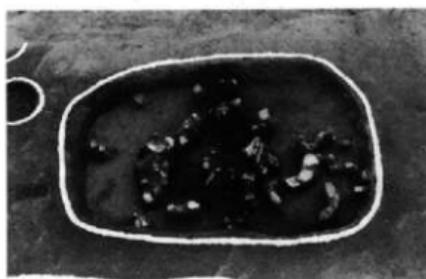


Fig.13 SKO1 土坑 (北から)

埋土からは、Fig.12,13のとおり土師器(甕、椀、皿、环)、瓦器(椀)、青磁(碗)、滑石製石鍋等が出土している。1~3は土師器小皿で、口径8.5~9cm、器高1cmを測る。2、3の色調は灰褐色を呈し、1は褐色を呈する。また、1の胎土には雲母砂粒を多く含み他と異なり、底部外面には板目压痕が残る。3、4は土師器の椀で、復元口径16.5cm、器高4.8cmを測る。4の口縁端部は丸味をもち、やや外反する。器面調整は不明であるが、高台は粘土紐の付け高台。5は口縁部がいぶしにより黒色を呈する。内面は横方向の範磨きが施されているが、外面は不明。高台は粘土紐の付け高台。青磁は破片で全形を知りえないが、碗と思われる。口縁部は緩やかに外反し、端部は丸味をもつ。釉はオリーブ色。石鍋は滑石製であるが全形は不明。



Fig.14 SKO1 土坑出土遺物

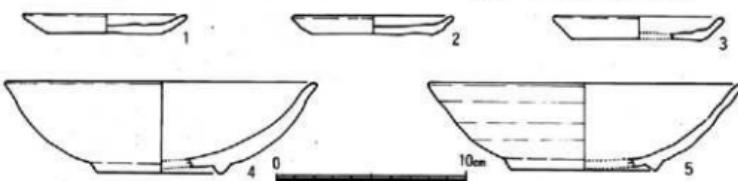


Fig.15 SKO1 土坑出土遺物 (縮尺1/3)

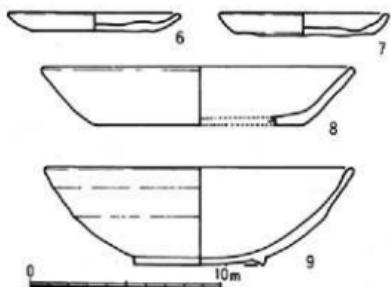


Fig.16 柱穴出土遺物 (縮尺1/3)



Fig.17 柱穴出土遺物

柱穴・小穴 主に調査区東半部に位置する。大半が径20~40cm、深さ5~30cmを測る。柱痕等は確認することが出来なかった。検出状況から、その多くが据立柱建物を構成するものと思われるが、建物規模を確認するにはいたらなかった。

遺物は、Fig.16の他に、土師器（皿・环・碗）、瓦質土器（碗）、滑石製石鍋、白磁（碗）が出土している。6、7は土師器の小皿で、口径9cm、器高1cmを測る。口縁部は僅かに立ち上がり、横ナデ的調整を併せたような成形である。色調は6が灰褐色を呈し、7は褐色を呈する。それぞれ底部外面には糸切痕と板目圧痕が残る。他の遺構から出土している土師器の小皿も同様である。8は土師器の环で、復元口径16.5cm、器高3.1cmを測る。胎土は0.5~1mm程の長石・石英砂粒を多く含み、色調は灰褐色を呈する。底部は平坦、口縁部は直線的に外反する。口縁端部は横ナデ調整により丸味をもつ。底部外面には糸切痕が残る。9は瓦器碗である。口径16.2cm、器高5.2cmを測る。环部は球形を呈し、底部がやや平坦。口縁部は弧を描くように緩やかに立ち上がり、端部は横ナデ調整により丸味をもつ。内面はナデの後、部分的に粗い笠磨きを施す。外面には口縁端部分だけ横ナデ調整が施され、他の部分はナデ。高台は粘土紐による付け高台。9は内型による製作りの可能性が高い。白磁碗は破片で全形を知りえない。復元口径16cm、口縁部は弧を描くように緩やかに立上がる。端部外面には幅7mmほど狭く、薄い玉縁。

第4章 まとめ

今回の調査では、縄文時代～中世の遺構・遺物を検出したが、その中心的時代は中世に比定される。本章では過去の調査成果を踏まえ、今調査で確認された点、疑問点を述べ、今後の調査の課題としたい。

遺構について

先述したように、本調査で検出した遺構は、溝、土坑、柱穴である。溝はその様相から、生活遺構的ではなく、生産遺構に関連するものと思われる。すなわち、耕作時における深耕に起因するものと思われる。時期的には確定しうる資料をもたない。また、溝の一部は自然流路のものも認められる。柱穴及び小穴の一部は掘立柱建物を構成するものと考えられるが、調査においては建物の規模を確認するには至らなかった。土坑は、覆土中遺物の出土状況から、廃棄物の投棄を目的としたものであろう。遺構の年代は、絶対的根拠を有しないが、第5次調査で確認された多数の掘立柱建物からなる集落の造営期（11～13世紀）に含まれる。

中世集落の西への広がりについては、本調査区において直接的遺構が認められなかつたが、これは直ちに集落の広がりを否定することにはならないだろう。ひとつに後世の耕作を中心とした削平を受けたことが充分に考えられることや、土坑の存在がある。しかし、調査区内において、井戸・生活水路等の削平を受けても充分に残存しうる遺構が認められなかつた。したがつて、集落が広がっていても端部的位置であったと思われる。

地割について

調査地を含む周辺地は方1町で整然と区画されている。この土地区画の出現期については、条里制に基づく説、それ以降の時代の整備説などがある。第5・8次調査では幅、数mを呈する南北溝を検出した。この溝は、その位置が方1町を画する線と合致することから、現代に至る土地区画基準線の先行的な溝である可能性が高いとされている。また、第7次調査ではこの南北溝から109m西に位置する地点において別の南北溝が検出されていることも強い根拠となつてゐる。以上のことから本調査区は、第5・8次調査の西方109m地点および、第7次調査で検出された南北溝の南直線上に位置することになる。しかしながら、調査区内においては合致する溝は遺存していない。これは、単に削平の有無だけが問題なのではなく、溝の存在、すなわち水利の変遷なども総合的に考える必要があろう。

田村遺跡群周辺主要遺跡調査報告書

- 福岡市教育委員会 「広石古墳群」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第41集 1977年
福岡市教育委員会 「広石古墳群」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第195集 1989年
福岡市教育委員会 「広石南墳群」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第214集 1989年
福岡市教育委員会 「生塚台」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第226集 1990年
福岡市教育委員会 「野方中原遺跡調査概報」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第30集 1974年
福岡市教育委員会 「羽根戸遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第134集 1986年
福岡市教育委員会 「羽根戸遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第180集 1988年
福岡市教育委員会 「羽根戸遺跡古墳群」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第198集 1989年
福岡市教育委員会 「半多田遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第27集 1974年
福岡市教育委員会 「宮の前遺跡下地点」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第13集 1971年
福岡市教育委員会 「下山門遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第23集 1973年
福岡市教育委員会 「下山門乙女遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第170集 1987年
福岡市教育委員会 「都地・七反田遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第223集 1990年
福岡市教育委員会 「後本・上田遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第220集 1990年
福岡市教育委員会 「金武古墳群発掘調査報告」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第15集 1971年
福岡市教育委員会 「影塚1号墳発掘調査報告」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第21集 1971年
福岡市教育委員会 「徳永アラタ古墳群」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第56集 1980年
福岡市教育委員会 「武要遺跡調査報告書1」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第68集 1981年
福岡市教育委員会 「丸留C群第1号墳」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第97集 1983年
福岡市教育委員会 「聖留遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第178集 1988年
福岡市教育委員会 「原遺跡(1)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第178集 1988年
福岡市教育委員会 「原遺跡(2)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第178集 1988年
福岡市教育委員会 「原遺跡(3)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第215集 1990年
福岡市教育委員会 「原遺跡(4)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第233集 1990年
福岡市教育委員会 「有田七田前遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第95集 1983年
福岡市教育委員会 「有田周辺遺跡調査概報」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第43集 1977年
福岡市教育委員会 「有田・小田部第1集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第58集 1980年
福岡市教育委員会 「有田・小田部第2集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第81集 1982年
福岡市教育委員会 「有田・小田部第3集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第84集 1982年
福岡市教育委員会 「有田・小田部第4集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第96集 1983年
福岡市教育委員会 「有田・小田部第5集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第110集 1984年
福岡市教育委員会 「有田・小田部第6集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第113集 1985年
福岡市教育委員会 「有田造跡群」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第129集 1986年
福岡市教育委員会 「有田・小田部第7集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第139集 1986年
福岡市教育委員会 「有田・小田部第8集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第155集 1987年
福岡市教育委員会 「有田・小田部第9集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第173集 1988年
福岡市教育委員会 「有田・小田部第10集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第212集 1989年
福岡市教育委員会 「有田・小田部第11集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第234集 1990年
福岡市教育委員会 「有田・小田部第12集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第264集 1991年
福岡市教育委員会 「有田・小田部第13集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第41集 1977年
福岡市教育委員会 「有田・小田部第14集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第266集 1991年

- 福岡市教育委員会 「西部地区埋蔵文化財調査報告書」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第64集 1981年
- 福岡市教育委員会 「山村道路Ⅰ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第89集 1982年
- 福岡市教育委員会 「山村道路Ⅱ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第104集 1984年
- 福岡市教育委員会 「山村道路Ⅲ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第167集 1987年
- 福岡市教育委員会 「山村道路Ⅳ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第168集 1987年
- 福岡市教育委員会 「山村道路Ⅴ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第192集 1988年
- 福岡市教育委員会 「山村道路Ⅵ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第200集 1989年
- 福岡市教育委員会 「山村道路Ⅶ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第216集 1977年
- 福岡市教育委員会 「山村道路Ⅷ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第41集 1977年
- 福岡市教育委員会 「六町ツイジ道路」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第92集 1983年
- 福岡市教育委員会 「次郎丸高石通路」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第69集 1981年
- 福岡市教育委員会 「西箇原辺道跡調査報告書(1)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第42集 1977年
- 福岡市教育委員会 「西箇原辺道跡調査報告書(2)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第47集 1978年
- 福岡市教育委員会 「西箇原辺道跡調査報告書(3)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第51集 1980年
- 福岡市教育委員会 「西箇原辺道跡調査報告書(4)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第63集 1977年
- 福岡市教育委員会 「西箇原辺道跡調査報告書(5)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第100集 1981年
- 福岡市教育委員会 「西箇原辺道跡調査報告書(6)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第172集 1987年
- 福岡市教育委員会 「西箇原辺道跡調査報告書(7)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第196集 1989年
- 福岡市教育委員会 「西箇原辺道跡調査報告書(8)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第199集 1989年
- 福岡市教育委員会 「古武原古墳群」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第54集 1980年
- 福岡市教育委員会 「古武道路跡群」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第127集 1986年
- 福岡市教育委員会 「古武高木一生涯時代通路跡の調査概要」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第143集 1986年
- 福岡市教育委員会 「古武道路跡群」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第187集 1988年
- 福岡市教育委員会 「古武道路跡群Ⅱ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第194集 1989年
- 福岡市教育委員会 「今山遠路(1)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第22集 1973年
- 福岡市教育委員会 「今山・今宿遠路」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第75集 1981年
- 福岡市教育委員会 「今宿五郎江遠路(1)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第132集 1986年
- 福岡市教育委員会 「藤崎通路」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第62集 1981年
- 福岡市教育委員会 「藤崎通路」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第80集 1982年
- 福岡市教育委員会 「藤崎通路Ⅱ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第137集 1986年
- 福岡市教育委員会 「藤崎通路Ⅲ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第138集 1986年
- 福岡市教育委員会 「藤崎通路Ⅳ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第232集 1990年
- 福岡市教育委員会 「堤造人野二枕線関係埋蔵文化財調査報告書(1)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第52集 1980年
- 福岡市教育委員会 「人部Ⅰ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第235集 1990年
- 福岡市教育委員会 「人部Ⅱ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第288集 1991年
- 福岡市教育委員会 「駒山Ⅰ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第236集 1990年
- 福岡市教育委員会 「駒山Ⅱ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第289集 1991年
- 福岡県教育委員会 「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第1集」 1970年
- 福岡県教育委員会 「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第3集」 1973年
- 福岡県教育委員会 「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第4集」 1976年
- 福岡県労働者住宅生活協同組合「宮の前道路A-D地点」 1971年

田村遺跡群第9次調査関係者

高橋健治（現 平尾中学校教諭）、大庭友子、村上かをり
有山吉太、井口菊太郎、伊藤みどり、牛尾秋子、牛尾シキヨ、牛尾
二三子、牛尾豊、大内文恵、尾崎達也、尾崎八重、金子ヨシ子、菊
池栄子、倉光ナツ子、柿光雄、正崎由須子、白坂フサヨ、岳美保子、
典略初、林嘉子、平田勇夫、真名子ユキエ、結城シズ、結城千賀子、
結城信子、結城弥澄、脇坂武実、池村留美、牛尾美保子、藤アイ子、
日名子節子、藤吉芽里、真名子順子。
以上の方々の他に、友納尚（田村本町々内会長）、二宮忠司（福岡市
埋蔵文化財センター）各氏の協力をいただきました。ありがとうございました。

田村遺跡

—VIII—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第302集

1992年（平成4年）3月13日 発行

編集発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8番1号
印 刷 株式会社玉川印刷所



